

今日、一緒に学ばせていただきます「正信偈」の箇所を一緒に拝読させていただきたいと思
います。八頁の二行目、「如来所以興出世」から「応信如来如実言」ですね。どうぞ声をお出し
く
ださいましてお願い致します。

如来所以興出世 唯説弥陀本願海

憶（おも）えば、釈迦如来はじめ諸仏がこの世に
出現してくださいましたのは、ただひとえに、海のように
果てしなく、深く広い、阿弥陀の本願を説くためでした。

五濁悪時群生海 応信如来如実言

人も世も、自我に執らわれていのちが見えず、破滅に向かって
溺れているはかり知れない人々は、まさに如来の、
人間を呼び覚ます真実の言葉を信受すべきであります。

今日は九月十日であります。今年の夏は特に暑かった感じが致しますが、まだ残暑は厳しいもの
でありますけれども、朝夕は秋の気配を感じるようになりました。今はオリンピック、パラリンピ
ックも開催されておりまして、平和ということがどれ程大事であるかということをつくづくと感じ
させていただくことでもあります。

平和と言えば先月の八月でございましたが、私はどうしても八月十五日の敗戦の日を忘れられま
せんし、また忘れてはならないと思えます。私どもから申しますと旧盆にあたるのであります
が、今年もやはり新聞等に取り上げられておりました。私の目に留まった俳句がありますので
ちょっと紹介させていただきます。

九月五日の朝日新聞に紹介された宮城さんという方の俳句なのですが、「戦争を 知らぬ為政者
敗戦忌」。為政者というのは政治を司る者ですね。そして終戦ではなく敗戦と歌われる。敗戦忌
ということ言われている所には、沢山の方々がどれ程犠牲になったかわからないという、そう
いうことが歌われていると思えます。終戦ということにつきましては、やはり深い願いである
けれども、終わったとは言えない。現に生々しい痛みが持続しているということがありま
す。戦争を知らぬ為政者という所には、戦争の気配が感じられるということについての恐れ
や、絶対にあってはならないという願いの込められた俳句だろうと思えます。

それからこれは非常に生々しいのですが、山田さんの歌で、「人の灰 汚泥となりし 原爆機」。
広島のことを歌ったのですね。その年には十数万の方々が亡くなられたということでありま
す。人の灰が泥になったという。やっぱりここには悲しみと同時に深い願いが込められて
いる。絶対戦争があってはならないという、平和が大事だということが込められていると思
います。

それから三井一夫さんの「原爆機 あの日あの時 あの叫び」。七十一年たっていますけれど
も、その声自身は消えることのない声であり、叫びであります。私たちはそういうことを
忘れてはならないということ、今の平和はそういう悲鳴を通してあるのだということ
を忘れてはならないと思えますね。

そういうことから思うと、北朝鮮が核実験をやるなんてことは、以ての外であるし、
根本的には核爆弾を必要としないような人間の生活を現実にするということが、
私たち本願のおみのりに遇うものにとってはそういう方向性がはっきり示されて
いるというふうに思うのであります。

それからもう一つ、これは八月の二十一日に一〇一歳で亡くなられました、むのたけじさんという方。敗戦の時には朝日新聞に勤めておられまして、八月十五日に辞職をなされました。戦争ということについての深い痛み、責任を感じられたのでしょうかね。秋田の方に帰られて、週刊新聞、『たいまつ』を何十年も作られました。辞められた後はご縁のある所に話に行かれたりしていたようです。

ちょうど一日一言ということを考えていた時に、岩波新書の『99歳一日一言』という冊子が目について、買って読んでおりました。それを読んでおる時にむのさんの訃報を知りまして、まあ不思議なご縁だと思いました。

中々全部が全部、同感するというわけではありませんが、ビビッと胸に響くそういう言葉が沢山あります。「一生に一度だって自分を見切るまい、我ら人間たちよ」。これは中々ね、骨のある言葉だと思います。何か都合の悪いとか思わしくないとか運命を呪いたくなるようなことになってくると見切ろうとするわけですね。もう死んだほうがいいのではないかと見切ろうとする。彼は見切りたいたいということがあったからこの言葉が出てきたのだらうと思います。我ら人間たちよという、そこに我らという言葉が入っております。こういう言葉は阿弥陀の本願のお心に響くような、通底するような言葉だと思います。

私がこういうことを敢えて申し上げたいのは、どうしても長生きすると役立たずになって駄目になっていくという、そういうイメージがあるじゃないですか。しかし人間が命をいただいて生きるということは、命のある限り、呼吸のある限り、見切ることはできない。そういうことを先輩が身を持って教えてくださっていると思われませんか。

それから「一人が本気で一人を大切にする。すると皆が皆を大切にする」。善いとか悪いとかということを超えてね、本当に大事な言葉だと思いますね。一人が本当に一人を大切にする。これは私たちからすればすぐ浮かぶ言葉がありますよね。親鸞聖人のつねのおおせ。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり

(真宗聖典 六四〇頁)

皆が皆を大切にすることとはどこから始まるかという、他に対する期待じゃなくして、一人が一人を大切にすることを抜きにしては始まらないという視点、眼がね、はっきりしていると思います。どこから人間を見るかという。高い所から見るとね、指導するとか要求ばかりになります。やっぱり自分自身が底辺。だから底辺に立った人の言葉とそうでない人の言葉は響きが違うと思います。

それから、「自分が燃えて人々の心を燃えさせる。自分はどこん燃えて燃え尽きる。それがたいまつ」。彼はたいまつ新聞を出した所には、そういう願いがあるわけですね。この言葉を聞くとね、私は親鸞聖人や清沢先生が非常に大事にされた、「自信教人信」という。自ら信じ、人を教えて信ぜしめるという。自ずと伝わっていくという。

たくさんの方々が私たちの気が付こうと気が付くまいと、この命ある世界では呼吸をしておられる。そういう大なる命のはたらきの中に私たちの生活が守られてあるのだなというようなことを教えられます。

先程ご一緒に「正信偈」のお勤めをご住職様の朗々たるご導師の元でお勤めさせていただきましたが、親鸞聖人の「正信偈」の正信念仏の歌というのは本当に格調が高いですね。格調が高いし、厳かであるし、あらゆる人々が共に生きることができる。人間は何故人間に生まれてきて生きていくのかというそういう根本的な問いがですね、歌い込まれております。

歌という所にはこれまでも申し上げてきましたように、讃嘆ということですね。讃えるという所には、ただ言葉の上で讃えるという話じゃなくして、感動ですね。感動という所には身も心も揚げて讃えずにはおれないという。人間のこの意識を突き破った、存在自身の感動だと。

今日学ばせていただきますのは、「如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。五濁悪時の群生海、如来如実の言を信ずべし」。というこの二行四句ですね。釈尊を始め、限りない仏様がこの世に出現してくださいました、そのいわれは、ただ阿弥陀の本願海を説かんとなりと。ただこのこと一つであります。

五濁悪時という所には、本当に生々しい問題の尽きないですね、人間の何とも言えない、人間業の闇ですね。この世界で一番強かなのはなんですか。人間ですな。人間は信心がないと人間じゃないですよ。畜生なのです。地獄・餓鬼・畜生の三悪道を生きる者なのです。難しい理屈を言っているのではないですよ。人間が本当に人間として生きることにおいてなくてはならないものを、お互いに学んでいこうということでありまして、決して難しい理屈を言うためにね、親鸞はご苦労なされたのではないのです。

あえて言わせていただければ、人間に生まれた者、一人も残らず、大事な人生を全うしてくださいと。全うしようではありませんかと。本当に生まれ難い人間に生まれてきたのでありますからと、そういうね、呼びかけですよ。それは親鸞聖人ご自身がね、私は決して立派な者じゃありませんと。愚かな罪の深い煩惱一杯の我が身でありますということを本当に正直にね。謙遜じゃないのですよ。これもよき人、法然上人に遇って、浄土真実の教えに遇えばこそ、罪惡深重煩惱一杯の我が身であるということを教えていただくのであります。

もう一つ言いますとね、そのことを教えていただくことによって初めて人間が見えてきた。自分自身が見えてきたのでありますということですよ。だからそういうことを踏まえてね、如来、世に興出したまうゆえはという。世というのはこの現実世界ですね。その時代社会、そこに生きる人々。その世に興出したまうという。興出というのは現れ出てくださった。どこか高い所から降って湧くようなそういう形じゃありません。この人間世界の苦悩の深い人々の生きている世界に現れ出てくださったという。如来、世に興出したまうゆえは、ただ阿弥陀の本願海を説かんがためでありますと。阿弥陀の本願海ですね。

五濁悪時の群生海。ここはですね、対句と言いましてね。如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀の本願海を説かんとなりと。これは唯説という。これは聖覚の『唯信鈔』に、唯という言葉について丁寧な注釈をしておられますが、

「唯」は、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことなばり。また「唯」は、ひとりというところなり。

(真宗聖典 五四七頁)

『唯信鈔文意』の初めの所に親鸞聖人が述べておられます。唯説、弥陀釈尊を初めとして、仏様方がこの世に興出してくださったそのいわれには、唯、このことひとつ。阿弥陀の本願海を説かんがためであると。この唯説という言葉は、五濁悪時の群生海、まさに如来如実の言を信ずべしと。唯説は応信に対応しているわけですね。阿弥陀の本願海は、五濁悪時の群生海。

五濁悪時ということはこの生々しいですね、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。いずれも濁。濁というのは濁るという字ですが、濁るというのは大事な意味があります。見えなくなるのですよ。コップでも水が透明な間は透き通って見えますけど、泥なんかが入って濁りますとね、見えなくなります。濁るというのは見えなくなると。何が見えなくなるかということ、自分が見えなくなり、人

が見えなくなると。

劫濁というのは自在ですね。現代には現代の劫濁というのがあります。科学文明は本当にもう極端なまでに進んでおりますけれども、先程の核兵器は大規模で人間を殺すわけでしょ。これは大きな闇です。インターネットも便利なだけじゃありません。そういう時代の問題ですね。

それから見濁というのは思想、考え方。思想考え方が深まってきているというのは確かに大事なことなのですが、それを正当化、絶対化。自見ですね。それが入りますと厄介です。忠告されても聞かんわけですよ。相手の揚げ足ばかりを取るわけです。それが見濁。煩惱というのはいよいよ巨大化してですね、人間不信に陥るわけですね。物や金で計るようになるわけです。欲望を満たしてくれる。貪瞋痴という三毒の煩惱はいよいよ高まっていつているということですね。

例えば、昔は貧しい時には夏の夜、部屋を開けて蚊帳を吊って涼しく寝られましたけれども、今はとてもそうじゃない。冷房しても足りない。そして社会的な仕組みとしては煩惱を仰ぐような仕組みになっていますわね。経済生活も密接に結びついております。

衆生濁ということは人間がバラバラでね、信頼を失うということがあります。これも恐ろしいことですね。

それから命濁についてですけれども。生物的な命は長生きで、かつてないほど長命なのだけでも、命がモノ化されると、短命ですね。深刻な例を申しますと、自殺をする方が未だに三万人近く。一日何十人という方が自殺をしておられる。それも働き盛りの方も非常に多いということがある。そういう所には五濁悪時。悪時というのは経済的とか文明的には進んでいるかもしれないけれども、人間が生きるという人間の生命。大事な命という所から受け取ると、いよいよ迷いが深い。人間がモノ化されている。この群生ということも生々しい表現ですね。群がり生えるわけですから、色んな草があっちこっちあったりして、そういうふうに生きている。

親鸞聖人は海という言葉、非常に大事にして使われます。恐らく流されて越後に流されて日本海を見て、そういうことを思わされたのだろうと思うのですが。そこには果てしなく広く深い、人間の想像を超えた広さ、深さ、底のなさ。だからそういう群生海に悩む者であればこそ、その群生海の底を貫いて、本願の如来の真実の呼び声に目覚ませずにはおかないという。

親鸞聖人は言葉を非常に大切にされる方ですが、『教行信証』の中で

「真実」というは、すなわちこれ如来なり。如来はすなわちこれ真実なり。

(真宗聖典 二二七頁)

「如来というは真実なり、真実は如来なり」という『涅槃経』の言葉を聞いておられますけど。その真実ということについて、歴史上の存在としてはインドに生まれた仏陀釈尊。それから釈尊自身が目覚める原理、はたらきとなったのは法ですね。法性法身という。これはもう色も形もない、真理それ自身のはたらきを法身仏という。

それから法身は色も形もない。阿弥陀様は報身、報いるという。本願に報いて、本願に応じておられた仏様。これを報身と申します。

それから釈尊のことを応化身という。応化身という言葉には非常に。人間の姿を持ってインドに誕生されて、修行なさって、法を覚られて、仏陀となられた。そういう応化身という。応化というのはこの現実の人間世界の上に人間の姿をとって現れてくださったという意味ですね。

親鸞聖人は、法然上人をよき人として敬い、勢至菩薩として敬っておられます。何度も申し上げますように、智慧光の力より本師源空表れてという。阿弥陀の智慧の光から表れてくださった方であると。人間法然だけれども、単に人間法然じゃない。阿弥陀の世界から現れくださった方である。

そういう受け取り方、出遇い方ですね。私はそれを固定化ではないと思います。法の妨げのない自在な表現ということにおいて、その人の上に現れている深い徳、深い出遇いということを讃えて、勢至菩薩であるという考えが。そういうことが本当に敬えるという所には五濁悪時の群生海に生きて、生身の苦悩の絶えない身であるということがあるわけです。

もしそこで、如来の本願に遇わなければ、闇のままに流されていった人生、私であったと。そういう人間業の抱えておる闇。痛みですね。これが非常に大事なのですよ。闇を感じず、痛みを感じずということがなければ、どんな尊いことを説かれても胸に響かないのですよ。身に沁みて感じられない。

人間業ということをも身口意の三業。身体、言葉、心。私は人間であることの痛み。例えば愛情ということにおいても闇を抱えておるのですよ。子どもを本当に大事にしているからといって闇がないのだと。そうじゃありません。目の前にいる自分の子どもは、身を捨てても悔いがないほど大事だけれども、人様の子どもはわからない。ましてや仮に、旦那さんなりなんなりが浮気してできた子どもになると消えてくれないかというようなことになるわけですよ。だから常識的に言うと人間はことのほかというかもしれませんけど、具体的にいうとそうではありません。具体的にいうことは、生身の人間から言えば兄弟でも争うのですよ。飢えている時に食べ物を分けると、どっちが大きいということが真剣な問題になるのですよ。命に別状のない間は余裕があるけれども、これを食べなければ死ぬということになるとね、深刻な争いになります。

そこに生身ということがあるのです。親鸞聖人はこの生身の人間の問題ということから絶対に視野を外しておりません。浄土の教えはそうであります。本願の教えもそうであります。だから理想ではありません。理想ではどうにもならないような生身の人間の現実ですね。それが問いとなっている。だからそこに五濁悪時の群生海ということが見えてくる。痛みとして感じられると。そこに如来所以興出世という。

今日のところでね、本当に大事だと思うのは、如来の出世本懐、あるいは出世の正意。仏陀が仏陀としてこの世に現れてくださった本懐。本当の願い。本当の心は何かということを書いてあるのです。讃えているのです。仏陀釈尊を始め、諸仏が現れてくださった本懐、本当の願いは何かと。何故そういうことが問題になるか。それをはっきりしているのです。五濁悪時を生きる群生。人々の上に本当の願い、本懐を明らかにするためであります。ずばり言えば私自身が人間に生まれた本懐。本当の願いは何かということから離れてはなりません。

例えば子どもから「お父さん、何で人間に生まれてきたの？人間生きてどうなるの？何のために生きてきたの？」と聞かれたらどう答えますか。言葉は優しい、聞かれている内容は正真正銘私の人生自身が問われているわけですね。だからそういう意味において阿弥陀の本願のおみのは、それこそ老少、老いも若きも善人も悪人も人間であるならば、あらゆる人々、一人も残さず、もらさず、問いかけられている教えであると。そういう出世の本懐。この世に生まれた本位を問われている。それが如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀の本願海を説かんとなりと。阿弥陀というのはご承知のように無限ですね、無量。限りない。境界がないわけですよ。無限な本願。根本の真実の願いの海。十方衆生が目覚めるとともに、本願という所には、一人ももらさず、目覚ませなければおれない。そういう海という所には無限なる如来。

智慧海無涯底という言葉がありますが、底知れない深さですね。無限なる深さ。そういう無限なる深さという所には、十方衆生の一人ももらさずという。言葉を変えて言えば、仏様の教えに背いて生きておる者もそこに含まれる。これは並大抵のことじゃないですよ。自分自身にも背いて生きるということがありますよね。悲しいかな。そういう除かれるような、除くような、そういうもの。

だから自分に見切りをつけるような。そういう人間に見切りをつけないと。これが本願ですよ。

人間は案外ね、見切りをつけるのが好きなのですよ。ある時には快感さえ覚えるような、そういう闇を抱えております。私が亡くなると悲しむだろうなとね、ことによったら快感にすらなるような。快感という言葉はちょっと言い過ぎかもしれませんが、それ程人間というのは己の弱さに酔う。迷うということがあります。自分で自分に見切りをつけるというようなこと、ましてや人にも見切りをつけるということがあるわけです。その人と苦悩を共にして生きるというようなね。それが本願の精神ですね。だからそこまで深く広い。如来、世に興出したもうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとりという。私たちがこの世に生まれてきたのは、仏陀釈尊の出世本懐の教えに出遇って、本当に私自身のいただいた命の尊さに目覚める。そういう真実のおおせに遇うためであったという。応信という所にはまさに信ずべしという。唯説の所に応信ということがね。

応信という所には私は、唯説に対してね、唯聞という。私たちは聞くことができるという。本当に聞かなきゃならないことがある。あれもこれもと思うけれども、本当に大事なこのこと一つ。それが本願真実ですね。聞いて響いた。それがまさに応信でしょう。如来如実の真実。如来の如実ということはどこまでも如来の真実、教え。真実を根拠として私たちの上に、ありありと生き生きと語りかけてくださる。そういう言葉、おおせですね。そういうことが、この「正信偈」の始め、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」が終わって、始め南無阿弥陀仏の帰敬が説かれて、法蔵菩薩因位時という、阿弥陀の法が説かれて、そしてここからはお釈迦様ですね、釈迦章というのですが、出世本懐。お釈迦様ですね、出世本懐への教えが非常に簡潔なね、言葉で仏陀釈尊が大慈悲を説かれた。その言葉自身も用いてね、表現されております。

ここの一段につきまして親鸞聖人がですね、『尊号真像銘文』で、前にも紹介いたしました、大変懇切にご自身の製作された「正信偈」について注釈をしておられます。五三〇頁ですね。終わりから四行目ですが、和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文。和朝というのは日本の国の愚禿釈親鸞が作った『正信偈』の文ということが書かれているのです。そして本願名号正定業からですね、正信偈の即横超絶五悪趣の所まで書かれて、その一句一句について了解を述べておられます。今日のところもですね、如来所以興出世というは、諸仏の世に出でたもうゆえはともうすなり。諸仏というところではですね、釈尊も諸仏の一人ですが、釈尊だけじゃなくして、諸々の仏様方が、世に出た所以はという。だから諸仏ということはね、やっぱり大変大事な意味を持ってきております。諸仏になっている。いわゆるね、一神教で言う絶対化じゃないのですよ。仏陀釈尊の覚られた法は、真実であるがゆえに、あらゆる方々が覚ることのできる法であると。その目覚めた方は諸仏であると。

これは身近に受け取るために紹介させていただくことなのですが、鈴木大拙、曾我量深、金子大栄、西谷啓治という方々が七〇〇回の御遠忌の時に話し合いをしておられた時に、親鸞の世界という本になっているのですけれども。その中で、鈴木先生が、諸仏というのは一体何だと、諸仏は何処におるかという問いを出されて。その時に曾我先生が、諸仏はここにおりますと、この部屋におりますというような言葉で語られておるのですよ。それは勿論固定化したり実体化したりすることはできませんが、念仏者の上にね、諸仏の徳がはたらくというふうなそういう意味があるわけです。

これはもっと身近に言えば、私たちの先立って行かれた祖先の方々。その祖先の方々がなければ私と言う存在もないわけですよ。父母があつて、私があるわけですから。その方々が大切な仏法を勧めてくださった方として出遇うときね、念仏者として敬うことができると。単に死者じゃなくして、諸仏のはたらきをしてくださる方として出遇うことができると。そういう意味があるわけですよ。

これも何度も紹介する親鸞聖人の歌ですけれども、

南無阿弥陀仏をとなうれば
十方無量の諸仏は
百重千重圍繞して
よろこびまもりたまうなり

(真宗聖典 四八八頁)

私はこの和讃は、決して大袈裟な和讃ではなくして、実感のこもった和讃であらうと思いますね。念仏生活ということは、開かれてくるとき、十方無量の量り知れない諸仏に護られ、育まれ、育てられて生きておるのだという。そういう大いなる視野が開かれてくるわけです。だから如来所以興出世のこの如来について親鸞聖人ご自身が如来というのは諸仏の世に出でたまうゆえともうす身なりと。唯説本願海。唯説弥陀本願海ともうすは、諸仏の世に出でたまう本懐は、ひとえに弥陀の願海一乗の祈りを説かんとなり。これは仏陀釈尊の教えにそういう感動、喜びを持って、いただかれた、受け取られた。法然上人、親鸞聖人。そのご自身の人生、ご生涯もまた唯説弥陀本願海というはたらきを自ずと持ってきますね。どうでしょうか。言い過ぎでしょうか。私は言い過ぎではないと思います。さながらだと思えますね。

それは先程申しました、親鸞聖人が法然上人を讃える時に、智慧光の力より本師源空現れて、浄土真宗、選択本願述べたまうということは大変な、非常に大事な意味があります。それは真実が現れてくる根拠、根底。まさしく原因は、何か。その視点が濁っていないということです。

例として悪いかもしれませんが、いわゆる怪しげな新宗教の場合は教祖様が絶対化されるのですよ。それは人間の分限を超えているわけです。だから浄土真実の教えではそういう人間の分限を超えないと。どこまでも自ずとなる法に随うという。法に随うという。真実の方に法る。これが揺るがない一点ですね。

唯説弥陀本願海ともうすは諸仏より出でたまう本願は、ひとえに弥陀の願海一乗のみのりを説かんとなり。この願海、一乗というのは、本願海、願海一乗海とも申しますが、わかりやすい言葉で言えば人にはそれぞれ才能もあり個性もあり能力の違いがあります。これは厳然としてあります。歳をとってくると、よくわかるのですけどね。それぞれがそれぞれの才能とか個性とか色々あるけれども、その全体を一人ももらすことなく目覚めしめんと。浄土に生まれしめんと。仏とならしめんと。仏とならしめんとというところに一乗という願いがあります。だから本願一乗の教えなのですよね。これは非常に大事なことなのです。

何故かならば、私たちはともすれば、人間の条件的な才能とか能力とかそういうものに優劣をつけてね、喜んだり悲しんだり威張ったり蔑んだりしますが、これはあくまでも世間の価値観。世間的な倫理観に立った道であって、五濁悪時の群生海の中だからこそ平等な救いは何かというところに本願一乗と言うことがあるわけです。

釈尊の仏弟子と言え自分の名前も書けないような周利槃特（しゅりはんどく）がね、釈尊の教えに出遇って目覚めていくような、そういうまさに真宗で表わされる、悪人正機というようなことがね、そういう人間が罪悪を犯さずしては生きられない。煩惱衆生の人間が本当に目覚めていくと。悪人こそ救い遂げんというところに一乗ということが開頭、開かれておるわけですね。

『大無量寿経』に出世本懐を語る言葉があるのですが、

釈迦、世に興出して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもってせんと欲してなり

(真宗聖典 一五二頁)

という言葉があるわけですが、そのことから「正信偈」に、「如来所以興出世 唯説弥陀本願海」と。だから「正信偈」を歌い上げられている依り処は、『大無量寿経』の真実に遇うということがはっきりしているわけです。それを受けてですね、

仏の世にいでたまうゆえは、弥陀の御ちかいをときてよろずの衆生をたすけすくわんとおぼしめすとしるべし

(真宗聖典 五三一頁)

よろずの衆生という所にはですね、その他大勢と言うような意味じゃないです。よろずの衆生。十方衆生ですね。よろずの衆生ということはありとあらゆる衆生ということです。ありとあらゆる衆生というのは、絶対に見忘れてはならないのは、そこに私がいるということです。私という一人がいるということです。私という一人を抜いたらよろずの衆生じゃありません。頭の観念であります、概念であります。そういうことをね、本当にそこに一人ということがいるという。これは本当にはっきりと教えてくださった方がひとえに親鸞一人がためなりけりということをつねのおおせとしてご述懐してくださった親鸞ですね。

だから私自身は率直に申し上げると、親鸞聖人の教えに出遇って、初めて本願が、仏法の教えが、伝統が、私一人のために我が身一人の為に開かれておるのであると。その我が身一人というのほどこまでも十方のよろずの衆生をすくわんがための道であるということが同時に教えられる。その時にですね、人間が単なる個人じゃなくして、現代の言葉で言うなら、命の量り知れない歴史、命の量り知れない交わり、繋がりですね。それを生きる一人として見出されるという、そういう意味がございます。

人間の悩みが特に深刻なのは、個人的になることですね。なんで私だけがこんな辛い目に遭わなきゃならんのだと。みんなは幸せそうに生きているのにと。そういう比較することによっていよいよ深刻になります。これは人間の凡夫性ですね。そういう凡夫性の闇を貫くと、そこに五濁悪時の群生海を貫くという意味がございます。親鸞聖人はですね、「五濁悪時群生海 応信如来如実言」というのは、五濁悪世のよろずの衆生。釈迦如来の言を深く信受すべしとなりという。信ずるということはやっぱり信受という。受けると、我が身のこととして受け取ると。丁寧言えば戴くと。信心をいただくということは具体的に言えば、私たちの全人生をいただくという意味があります。戴くというところには、人間の予想、計算を超えた身に余るものを戴くという意味があります。

尾崎放哉という有名な方がおられました、小豆島で亡くなられた。東大を出たね、優秀な方だったのだけれども、ついには深いご縁があって、乞食僧になられたわけでありまして。放哉はご承知のように、「いれものがない、両手でうける」というね。お寺様のいわゆるお手伝いと言うか、そういうものをされながら貧しい生活をしておられた。しかし、「いれものがない、両手でうける」というこの詩はね、実に豊かでしょ。裸一貫の身がね、両手で受け取れないほどのものを戴くということでしょ。私は自分なりに戴けば、人生自身を戴く。存在自身を戴く。そういう意味を持っていると思いますね。

方哉の句にはね、「咳をしても一人」という有名な句があるのです。風邪を引いて咳をしてもね、一人だと。本当に孤独ということをね、身に沁みるほどの孤独を歌っているわけです。そういう人間の深い悲しみを歌っている、寂しさを歌っている放哉が、「いれものがない、両手でうける」という。そういう一句は放哉自身の人生が輝くような一句であろうと思いますね。

私たちが南無阿弥陀仏の念仏に遇うと、本願の名号は正定の業なり。至心信樂の願を因と為す。

等覺を成り、大涅槃を証すること、必至滅度の願成就なりと。この前の阿弥陀を讃える「正信偈」の言葉であります、そういう阿弥陀の本願のおみのり。仏陀釈尊の出世本懐の教えに会う時、私たちの人生が、想定とか予想を超えてね、本当に尊い、かけがえのない人生をいただく身とならせていただくのであります。それは十方の人々に開かれた間違えのない教えでありますということをおね、讃嘆され。出世本懐の正意の信を得るとき、よくぞよくぞ人間に生まれさせていただいたこのかたじけなさよと。そういう感動がね、脈打っていると思いますね。よくぞよくぞ人間の歴史の中で、闇の深い、迷いの深いそういう歩みの中で、本願真実の教えを表わされ、出遇われ、讃えてくださったというそういうことが、二十一世紀の現年という私たちにも響いてくる、そういう感銘を覚えるのであります。

「応信如来如実言」、まさに如来の如実の言を信ずべしというところには、仏陀釈尊の真実の教えに触れてですね、親鸞聖人は特に機の深信ということを深く戴かれておりますけれども。

自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなきに身としれ。

(真宗聖典 六四〇頁)

そういう人間存在の非常に深いね、罪惡性、問題性。闇ということに目覚めて、それを救い遂げなければ、阿弥陀が阿弥陀とはならないという真実のおみのりであった感動がね、大地から湧き出すように歌われているというふうに思いますね。まさに如来、如実の言を信ずべしと。

先程出しました、自殺をなさるといふ所には、依り処がないとか、信ずべきものがないとか、そういうことで混乱してね、自らの命を殺めるということがおありになるかもしれませんけれども、すでにこの道ありと。ここに本当に生きることの出来る道があった、真実のおおせがあった。真実のおおせに生きる人々と遇った。念仏者がいますというふうなことに気づき、出遇うということは自分自身の人生を根本から開いていくような出来事であるというふうに教えられます。私たちは「正信偈」をいただいて、そういう広大な深い世界の一部でもね、教えられるということはまことに大きな恩恵ではないかと思われまふ。あつという間に時間が一時間ぐらいたったということでございますので、今日はいつもより早いかもしれませんが、話の方はこれで一応終わらせていただきまして、後は座談会でよろしくお願い致します。